

## 事例報告：音の探検隊～夏の音探し～

Report: Sound Exploratory Party –What Is Your Summer Sound ?–

大門信也(Shin-ya Daimon)、永幡幸司(Koji Nagahata)

### 1. はじめに

昨今、教育現場では環境教育が脚光を浴びており、小中学校の授業や自治体による環境行政事業の一環として、様々なプログラムが実践されてきている。そういった中、音環境教育のプログラムも各地で実践されている。

音環境教育のプログラムについては『サウンド・エデュケーション』<sup>1)</sup>『音探しの本』<sup>2)</sup>『心の耳を育てる』<sup>3)</sup>という参考になる書籍が出版されている。しかし、実際に音環境教育を実施しようとする時は、それらに書いてあることをそのまま実施するだけでは、地域の特徴などを反映した効果的なプログラムにはならない。効果的なプログラムを行うためには、地域性などを考慮に入れた綿密なプログラム設計が求められるが、これはプログラム作成の経験が浅い者等にとっては困難な作

業であろう。

力石ら<sup>4)</sup>は、音環境教育のプログラムのデータベース化を行い、それにより教育プログラムの構築支援が行えることを示唆した。そして、データベースの内容を拡充していく必要があることを述べている。

そこで本報では、実践例の一つとして、著者らが行った親子を対象とした音環境ワークショップの報告を行いたい。

### 2. 概要

音環境ワークショップ「音の探検隊～夏の音探し～」は2000年8月1日(月)、福島市環境課が主催する「夏休み親子環境教室」の一環として行なわれた。

参加者は市の広報紙上の告知により集まった児童13名と母親3名であった。広報では対象を小学校高学年として募集したが、実際には小学校2年生から中学校2年生までの幅広い年齢の児童が参加した。

本ワークショップが行なわれたのは、JR福島駅の東北に位置する信夫山周辺で、信夫山の麓にある信夫山児童公園をスタート地点とし、信夫山と山の南側の市街地で音探しを行った(図1)。

プログラムの作成及び、当日の運営は福島大学行政社会学部永幡研究室が行った。

### 3. 当日の流れ

当日の大まかな流れを表1に示す。

表1：プログラムの流れ

時間	主な作業	場所
13:00～	グループづくり・他己紹介	信夫山児童公園
13:30～	音探し前半	信夫山
13:50～	音探し後半	市街地
15:00～	意見交換	福島市民会館
15:45～	全体発表会	
16:30		終了



図1：ワークショップ開催エリア

1) 準備—グループづくり・他己紹介—

集合して受付を終了した後、児童を3つのグループに分けた。この際、各グループに必ず異なる学年の児童が含まれるように、まず学年順に列をつくり、端から順番に「1 2 3 1 2 3～」というように1から3の番号を一人一人に割り振り、同じ番号が当たった人同士を同じグループにするという手順によった。また、保護者達は1つのグループとした。

次に、グループ内の親睦を深めるために「他己紹介」を行った。他己紹介とは、初対面の人が集まって行うワークショップの冒頭で利用されるプログラムである。本ワークショップでは、まず各グループの中でさらに2人組をつくり、お互いにインタビューをする。それが終わったらグループごとに再集合し、各自が自分の相手についてグループのメンバーに紹介するという手順で行った。この時、音環境に関するワークショップであることを印象付けるため、インタビューの項目に、「今朝最初に聴いた音は何の音か」など、音に関する内容を含めるよう指示した。

2) 体験—音探し—

今回のプログラムは、音を出しながらまちを歩いているスタッフ（以下オニと表記）を探す音の鬼ごっこ（表2）をしながら、「涼しげな音」などのテーマをもとにまちで聞こえる音を探し、その音源をデジタルカメラで撮ってくるまちの音探しをするという、2種類のゲームが同時に展開する構造になっている。また、フィールドを前半の信夫山と後半の市街地との2つに分け、後半はダミーのオニを配置するなどして、前半よりも難易度を上げた。全体の構成は、図2に示す通りである。このような複雑な構成としたのは、難易度を

表2：オニの役割表

役割	出す音	参加者に出す指示	場所
笛	笛を吹きながら歩く。	涼しげな音を探す。	信夫山 (前半)
鉦	所定の場所で座りながら鉦を鳴らす。	楽しい音を探す。	
鈴	鈴を鳴らしながら市街地を歩く。	不思議な音を探す。	
鈴のダミー	紛らわしい音を出しながら歩く。	—	市街地 (後半)
ゲタ	ゲタを履いて歩く。	夏を感じる音を探す。	
豆腐屋	所定の場所で豆腐屋のラッパを吹く。	この写真を撮った場所を探し、そこで聞こえる音を聴いてくる。	
豆腐屋のダミー	郭公笛を吹きながら歩く。	—	

※文中、役割別のオニの表記は、この表の表記に順ずる。

適度に上げることにより、当初の対象者である小学校高学年生が、楽しんでプログラムに取り組めると考えたからである。

次に具体的な進行を示す。

最初に進行役から「信夫山にいるオニを探し、指示をもらおう」という指示が参加者に出され、前半の音の鬼ごっこが始まる。信夫山に配置された笛と鉦は参加者に見つかったら、それぞれ表2に示した指示を出す。参加者はその指示をもとにまちの音探しを行い、音を発見したら進行役のいる児童公園に戻る。

進行役は次に、「市街地にいるオニを探し指示を受ける」「豆腐屋のラッパの音のみ午後2時半以降に聞こえる」という指示を出す。

鈴とゲタは前半のオニ同様、「～の音を探す」という指示を出す。そして豆腐屋は、各グループに一枚ずつ写真を渡し「この写真を撮った場所を探し、そこにある音を聴いてくる」と指示し、そこがゴールである旨を告げる。参加者は指示された音を探した後、写真が撮られた場所を探してゴールを目指す。

当日は、グループ間でゴールの時間に差があったが、当初の予定時刻の午後3時を大きく越えることもなく、全グループが無事に到着した。

3) 共有一意見交換・発表会—

会場ではまず、参加者の撮ってきた写真をパソコンに取り込み、感想を記入する欄の入ったシートに貼りつけ、それを印刷し各グループに配った。参加者はグループごとに集ま

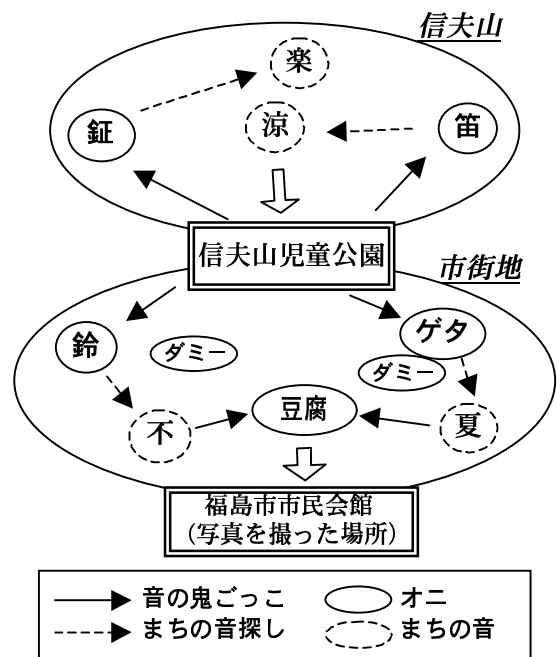


図2：音探しの構成

り、そのシートを見ながら意見交換を行い、そこで聴いた音の説明や感想をまとめた（図3、4）。また、「ふりかえりシート」を配布し、こちらにも記入してもらった。当日は、最後に到着したグループの作業が終わるまでの間、早く帰ってきたグループの人達で簡単な音遊びを行った。

最後に全体発表として、パソコンに取り込んだ写真をプロジェクターで映しながら、各グループの担当者が探してきた音の説明などを行い、午後4時30分全プログラムを終えた。

#### 4. 参加者が見つけた音

次にまちの音探しで参加者が見つけてきた音を紹介する。

##### 1) 涼しげな音

全てのグループが図3のように噴水の音を挙げた。

##### 2) 楽しい音

それぞれ川にいるカモ（図4）、笛担当のスタッフ、ゲタ担当のスタッフと、涼しげな音と違いグループごとに回答が分かれた。2グループがスタッフを挙げているが、この日は外で遊ぶ子ども達がいなかったこともあり、探すのに苦労したようである。

##### 3) 不思議な音

2グループが盲人用音響信号を挙げた。も

う1つのグループは当初電動自動車の音を挙げる予定だったが、写真が撮れていなかったため、涼しげな音の候補として撮っていた樹木の葉擦れの音を不思議な音として代用した。涼しげな音同様苦労したようである。

##### 4) 夏らしい音

2グループがセミの声を挙げ、1グループは適当な音を見つけることができなかった。セミの声を挙げたグループは、音探しよりもセミの写真を撮ることに苦労したようだ。

##### 5) 写真の場所で聞こえた音

写真を撮った場所は、福島市市民会館の屋上で、ここは意見交換等を行う会場でもある。多少難解な課題ではあったが、随行スタッフの誘導もあり、全グループ無事に到着した。そこで聴いた音については、セミの声が聞こえたというコメントが9名と多数を占めた。

#### 5. 参加者の感想

当日の感想を記入してもらうため、過去のワークショップ<sup>5)</sup>を参考に作成した「ふりかえりシート」を参加者全員に配った。シートには「私が気がついたのは」、「私がおどろいたのは」、「わたしが残念だったのは」、「これから実行しようと思ったのは」という言葉が書いてあり、参加者は各文に続けて文章を完成させることで、各自がワークショップを

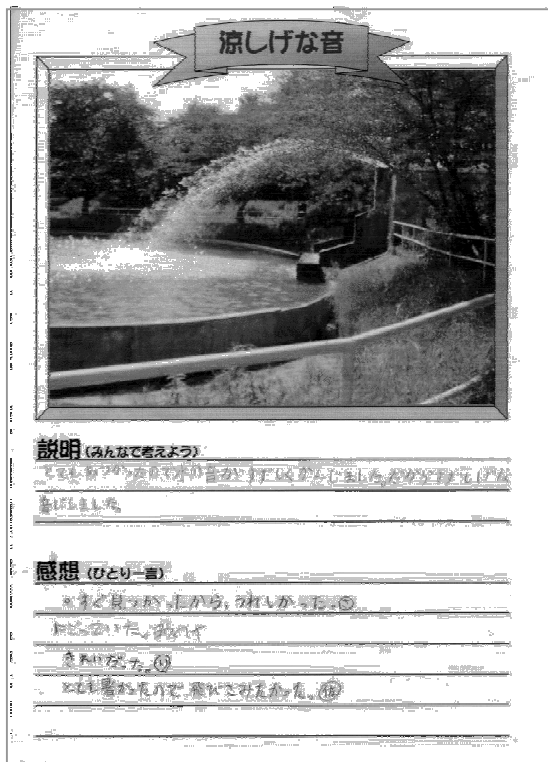


図3：涼しげな音に対する記入例

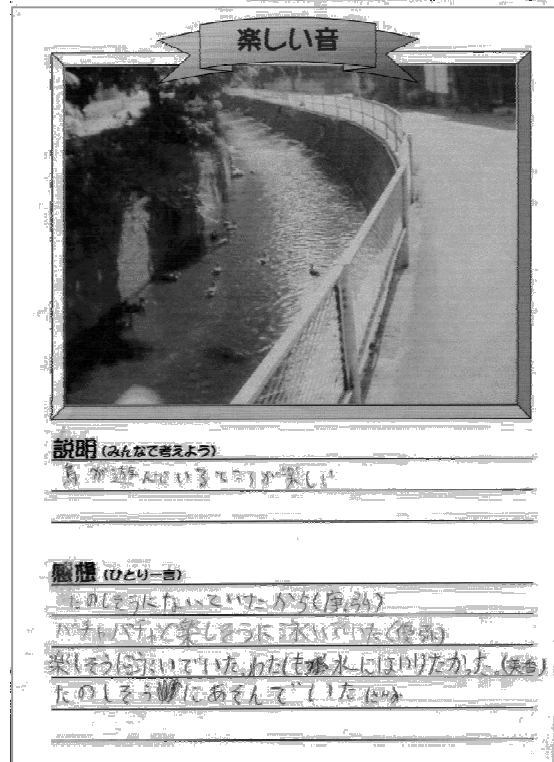


図4：楽しい音に対する記入例

振り返った。

以下、主なコメントを見ていきたい。

#### 1) わたしが気がついたのは

「音に対して無関心でした」「暑くてとてもつかれたけれど、音をいっばいさがすことができた」「かだいを出されるといつも聞いていない音をさがすことができ、外にはいろんな音があるんだと気づいた」など、7名から本ワークショップの意図を理解するコメントを得ることができた。一方で、「こんなにある日はえんそくの時がいはいはじめてだった」「ふだんこんな歩かないからつかれた」といったコメントもあった。これらから、特に低学年には、本プログラムが少々ハードだったことが伺える。

#### 2) わたしがおどろいたのは

「街の中でもせみの声があふれていた」「せみの声がうるさかった」「セミがすごくうるさくてちょっとおどろいた」と、セミに関するコメントが多く、7名であった。また、「たくさん音があったのはおどろいた」「せみの声だけじゃなくて、よく聞くと葉っぱのゆれる音など、いろいろな音があつて、楽しかった」など、『わたしが気がついたのは』と同様、「音への気づき」に関するコメントをした人が5名いた。

#### 3) わたしが残念だったのは

「とてもあつかったです。ちょっとやすみたかったです」「今日はあつくて、頭がいたくなかった。おわるまでの時間がながかった」「あつすぎた」など、5名から暑さに関するコメントがあり、ここでも当日の暑さが伺える。

#### 4) これから実行しようと思ったのは

「いろいろな音に関心をもつ。音を楽しみたいと思います」「自分で不思議な音を作ってみたり、家の中の音をさがしてみたい」「音にびんかんになる」といったコメントが5名から得られた。一方で、特に低学年から「とにかくあるく」「歩く」などのコメントがあった。

寄せられたコメントを全体的に見ると、特に高学年を中心に本プログラムの意図は概ね伝わっていることがわかる。このことから、今回のプログラムの難易度は、当初からの対象者である高学年にとっては適当であったと

考えて良いだろう。

一方、暑さや疲労に関するコメントの多さからは、天候や参加者の体力面によって成否を左右されるワークショップの難しさを実感させられる。今回は特に、想定した対象年齢層よりも、低い年齢層の参加者がいたことがこれらのコメントを生む一因となっていた。こういった場合の対処の仕方については、今後検討すべき課題である。

#### 6. ホームページによる情報提供

今回のワークショップを、音環境教育の実践例の一つとして知ってもらうため、プログラムの概要と当日の様子を紹介するホームページを作成した (<http://www.ads.fukushima-u.ac.jp/~nght/ws/>)。2000年8月18日に公開してから、10月18日までに189件のアクセスがあった。また参加者からは、夏休みの自由課題のために画像をダウンロードした旨の連絡が来た。

#### 7. おわりに

以上、著者らが行った音環境ワークショップの様子を紹介してきた。参加者の感想から判断すると、ワークショップの意図は、高学年を中心に概ね伝わったと言えよう。著者らの研究室では、この経験を踏まえ、今後もワークショップの企画・運営を行いたいと考えている。

#### 8. 参考文献

- 1) R・マリー・シェーファー：『サウンド・エデュケーション』（春秋社、1992）。
- 2) R・マリー・シェーファー、今田匡彦：『音探しの本 リトル・サウンド・エデュケーション』（春秋社、1996）。
- 3) 長谷川有機子：『心の耳を育てる』（音楽之友社、1998年）。
- 4) 力石康文、土田義郎：サウンド・エデュケーションの構築に関する研究～既往教育プログラムの分類・整理～、サウンドスケープ第2巻、2000。
- 5) 環境庁：『「伝えよう！エコロジカル・アクション」報告書』（1997）。